

「大江広元」という「公務員」

－この国の「公務員」のひとつの「かたち」－

鵜養 幸雄

OE no Hiromoto: One of the Typical and Ideal Bureaucrats?

Yukio UKAI

Abstract

OE no Hiromoto (1148-1225) had served as middle class official of Kyoto Government, then he joined subordinates of MINAMOTO Yoritomo, and contributed to establish, maintain and develop the Kamakura Bakufu (Shogunate). Deeply concerned to the decision making of important policies, but he played the role of civil service, not of politician. The way he acted suggests in many aspects to the role and expected behavior of the modern public servant.

1. はじめに

かつて司馬遼太郎は「日本の役人道」と題するエッセイの中で、「日本の場合は、江戸中期にはもう中国とはちがう官吏道が出来上がった」とした上で、「日本の官吏の祖」の例として、「鎌倉幕府の事務官だった大江広元（1148-1225）」を掲げている（司馬（2000））。

鎌倉幕府を一つの政府・国の行政組織としてとらえた場合（「将軍は天皇に対峙する東の王」とする説明（本郷（和）（2010））も説得力がある）、そこにおける広元の立場は、今日の公務員制度の整理からは、典型的な職業公務員である「一般職」（国家公務員法（昭和22年法律第120号）第2条第2項）というより「特別職」（同条第3項）に相当するものといえる。

しかし、広元を指すときには、「官吏」・「事務官」という言葉が用いられることに示されるように、「政治家」というより「行政官」のイメージが強いといえる。（もっとも、上杉（2005）は、「『将軍に忠実な腹心』あるいは『実直な幕府の役人』というイメージに収斂しきれない、政治家広元の立体的な姿の復元」を目指したとされる。）

ときに「参謀」、「黒子」、また、「黒幕」とも称される広元の姿は、歴史の文脈を勘案しつつも、今日と共通す

る「公務員」の能力・資質、幹部行政官としての役割、政官関係の中での立ち位置等現在の公務員のありようとの比較で参考となると思われるところである。

本稿は、上杉（2005、2015）、五味（2016）、佐藤（2014）等歴史学での研究集積に依りつつ、政治・行政をつなぐ「公務員」の姿という視点から、その活動の位置づけを整理・考察し、また現代の公務員イメージをとらえる点で参考となる小説等でのさまざまな描かれ方も参照して、その「人物像」をめぐる「言説」（discours）を浮き彫りにしようと試みるものである。

なお、広元が「大江」姓となったのは、1216（建保4）年、69歳の時であり、幕府での活躍時期のかなり長くは「中原広元」であった。（歴史概説書等でも、例えば、本郷（恵）（2008）は原則として「中原広元」と記している。）

改姓については、「伝統的文官官僚の家の維持」に関しての「実朝の有していた強烈な『家』意識があったことを想定しておきたいと思う。」という指摘もあり（上杉（2005））、他方、「他の中原氏の文士とは異なる《武士》の要素をもつ新しい「家」を興すという意識があったのではなかろうか」とする説もあり（佐藤（2014））、また、「大江」の家名を望んだ広元が、正統の弘忠の子を殺害し、大江家断絶を招来しつつ、名門大江家を名乗れるよ

う謀ったとの推論を展開したもの(大江(2003))もある。本稿では、原則として姓を略して「広元」とのみ表記する。

2. 生没年・出自

広元の生没年については、異説もあるが、一般に、1148(久安4)年生まれ、1225(嘉禄元)年に78歳で没したとされる。「平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての日本における政治の激動を、広元ほどあざやかに一身に体现した人物は、多くはない」(上杉(2005))とあるところである。

その出自については諸説(3説)があり、上杉(2005)は、中原氏から大江氏に改姓の際の朝廷への文書からも大江維光を実父と判断する。他方、「むしろ父親が定かでない生い立ちであった点を重視したい」との指摘(佐藤(2014))もある。

3. 「京下り」と鎌倉(幕府)での「中途採用」

広元は、中原家(明経道(儒学)・明法道(律令))・大江家(文章道)といった環境の中で、「官人」への道を歩むことになるが、若い時から学業に秀で、明経道の学生の中から成績優秀なものが選ばれる明経得業生(下級貴族の家の出身者にとっては任官に通じる重要なステップの一つ)となり、1168(仁安3)年の縫殿充(縫殿寮の三等官)を振り出しに、1170(嘉応2)年には、身につけていた明経道の識見が活かせるどころの朝廷の公文書を扱う外記職である権少外記となり、翌1171(承安元)年に1ランク上の少外記に昇進しており、また、官位についても、1173(承安3)年従五位下として貴族の仲間入り、1183(寿永2)年には従五位上に叙されている(上杉(2005))。

もっとも当時、実務官人は最終官職として高位を望むのは難しい状況であった。実務官僚(職業公務員)の占める(期待される)ポストが中・下位層で、上位は政治的な任用によるという点で見れば現在のアメリカ的な階層構成であったともいえる。

広元は、京都を離れて鎌倉へ下向(「京下り」)することになるが、その時期は、記録上でも必ずしも明確ではない。『江氏家譜』など1180(治承4)年とするものもあるが、広元の活動が記される『吾妻鏡』での初出は1184(寿永3・元暦元)年であり、頼朝の右筆・公文所

別当となったこの年(又は前年)に下向したと考えるのが合理的と思われる(上杉(2005)、前田(1998))。

なお、「京下り」をしたといっても、京都で得た位階・収入は維持されていた点では、現職を投げ打っての「転職」とは異なるところもある。

また、旧・現職のパイプ役の意義はあるが、その能力の活用への期待、「癒着」のツールとは考えられないことなどいわゆる「天下り」とも質が異なるものである。今日批判の対象とされる「天下り」との対比では、関(2004)は次のように述べている。

・「退職官僚を受け入れる側の人事的目的は、彼らの実務能力に加え、中央とのパイプを獲得することであろう。また、「生え抜き」の陥りがちな停滞を、優秀な「異物」にうち破って欲しいという期待もあるはずだ。現実にはその期待に応えることが少ないから、評判が悪いのだろうが……。日本史には、とびきりうまくいった例がある。それが今回取り上げる大江広元だ。」

鎌倉側から見ると、「京下り」は「中途採用」でもあるが、鎌倉という雇用機会の出現による雇用の流動化をふまえた「能力主義人事」でもあったといえる。この転職は、作家の目には「花咲ける中年転職」(永井(1994))とも映っている。

能力(人物)の評価に関しては、「外記在任十余年の経験は凡百の京下官人の遠く及ぶところではないから、頼朝が広元をスカウトした利益は測り知れないほど大きかった」(目崎(1974))といえよう。

4. 幕府中枢におけるそのときどきの活動

4.1. 頼朝への取次役

兄頼朝の不興を買った義経が鎌倉腰越で足止めされたときに認めたとされるいわゆる「腰越状」がある。(史実としては疑問で後世の創作と考えられるとの指摘もある(近藤(2016))。)

ただ、義経が書状で広元を取次役とすることが自然なことと捉えられるところに当時の幕府内の構図がうかがわれる。その扱いについては、「広元は、義経の書状を開き見ながら、その処置については明確な答えを述べず、おそらく広元は、「頼朝と相談の上で、はっきりとした態度をとらないことで義経を追い返すつもりであったのだろう」(上杉(2005))とされる。なお、『平家物語』、『義経記』、『吾妻鏡』といった文献上、書状の本文

ほぼ同文であるのに期日と広元の官職名が区々であることを踏まえ、文書の実在性には疑問を示しつつ、「この時代の人が義経に代わって頼朝に訴えたい真情を述べたもの」とする指摘もある（角川・高田（1966）（2005））。

4.2. 守護・地頭制への貢献（文治元（1185）年）

鎌倉政権の大きな政策であった「守護・地頭」の企画立案について深く関わっている。この点については、『吾妻鑑』によって作られた「広元伝説」であるとの異論等もあるが、広元のみを発案かどうかを留保しても立案への貢献については肯定でき、また、これを実現するための京都朝廷との交渉の功績は広元の交渉能力に依るといえよう（上杉（2005））。

関（2004）によれば、広元の「[「地場」を超えた思考法]によるところが大きく、また、この提案を「京都に呑ませたタイミング」についても、頼朝追討の論旨が失敗し、王朝側がパニックに陥っていたまさにその時にこの提案を突きつけた点を評価している。なお、頼山陽『日本政記』では、「広元は当時目習口慣する所の者に因り、名を為して之を請ふ。而して朝廷之を許すに易し。」（当時耳目になれていた名称をつけて、設置を奏請したので、朝廷はこれをたやすく許可してしまった（丸山（1972））と説明している。

守護・地頭の「献策」については、企画立案者としての広元が当然のように受け取られたのか、『吾妻鑑』の記述後、近世・近代の文献でも、例えば、次のように表現されている。

- ・「広元、議して曰く」（『大日本史』）
- ・「大江広元の策を用ひて」（新井白石『読史余論』）
- ・「大江広元、策を建てて曰く」（頼山陽『日本外史』）
- ・「大江の広元則ち策を立てて曰く」（田口卯吉『日本開化小史』）
- ・「以て天下を制するの議を発案したるもの」（山路愛山『源頼朝』）

4.3. 京都朝廷との交渉における代表の役割

京・鎌倉間の交渉に関しては、頼朝の代理としての地位（「二品御腹心専一の者」として京都側から扱われたとされる。『吾妻鑑』文治2年閏7月19日条）をいち早く確立して、京都の組織・行動文化を熟知した上で、タイミングよく、また、剛柔を使い分けた交渉術を展開し、朝廷側のパイプについても、当初はかつて朝廷勤務時代

の上司であった九条兼実を、次いではその政敵の源通親と親密な関係を結ぶ（慈円『愚管抄』の表現では「方人」）など辣腕を発揮している（上杉（2005））。

4.4. トップの交代の場面での行政の継続

頼朝に仕え、その死後も頼家、実朝、そしてこれらを通じた時期の北条氏といった時の実力者であり政治的リーダーを広元は支え続けた。もちろん、その地位が磐石であったわけではなく、いくつかの危機（修羅場）を乗り越える場面もあったが、相次ぐトップの交代の中で、行政の継続・安定への貢献は高く評価されるものであろう。

肅々と行政を執行しつつ、必要に応じた献策、進言等を行った姿が『吾妻鑑』等の淡々とした数多くの事務記録からうかがわれる。なお、実朝との関係では、文化人実朝のために京都とのパイプを活かした貢献は大きいものの内政面での進言（諫言）が必ずしも受け入れられなかったことがいくつか『吾妻鑑』に記されているが、これらはむしろ、受け入れなかった側に問題があり広元自身の進言は正当であったことがうかがわれるものとなっているところである。

「鎌倉幕府の官僚制化」（保永（2004））が進む中で、広元は、行政組織としての安定化にも資しているが、さらに、公文所・政所の別当（長官）として残した事例蓄積等の文書が、貞永式目（関東御成敗式目）の根底にある「道理」による政治の基本となっているといわれるなど、後世に影響の大きな制度化への契機となって面もあるところである。（上杉（2005）は、「泰時による『御成敗式目』制定は、広元が没したことを機に、頼朝の時代の政治方針が明文化されたことを意味する。広元がさらに長寿を保ったならば、あるいは『御成敗式目』はもっと遅れて制定されていたかもしれない」と記している。）

4.5. 「文士」の姿とそれを超えた姿

いわゆる和田合戦（1213（建保元）年）の中でも執務をし、また將軍実朝に和歌二首を自筆の願書として認めさせるなど「合戦の場での『文士』広元の奉公の場面」（上杉（2005））も見られている。

また、頼家廃嫡、北条氏と比企氏との抗争に際しては、「兵法に於ては、是非を辨ぜず」（『吾妻鑑』建仁3（1203）年9月2日条）としていたが、その一方で、承久の乱でのポジショニングは、「文士」を超えた主張を行っている。

主戦論を展開、出陣決定後も躊躇する武士に即刻出陣を叱咤するなど、武人顔負けの激しさを示している。(この点、「京下り官人」の「異物」の要素が発揮されたとする見方がある(関(2004))一方、貴族社会の伝統的な理念である「天道」の思想に基づく勝利の確信があったとする指摘(河内・新田(2011))もある。)

4.6. 「官」のありよう

以上のようなさまざまな場面での広元の行動は、「政」から見たとき、一つの理想的な「官」の姿ともいえよう。

もっとも、平盛時・藤原俊兼のような「実務家タイプ」と対比して、『政治家タイプ』の代表は言うまでもなく中原広元である。彼の活動は、たとえいわゆる『広元伝説』の面を割り引いても、なお鎌倉幕府草創史をなすというべきである(目崎(1974))と「官」を超えた「政」の姿と映る面もある。

後述(5.)のイメージの描写等からもうかがわれるが、手堅さ、合理的行動、冷徹さ、ときに政治トップに対してタイムリーな進言・苦言・助言・援護を行うなど、このような人物が側近にいたならば使いやすくと感じられよう。(他方、政治的なライバルからは非常に面倒な人物でもあったと思われ、このことが旧来の御家人層との軋轢にしばしば遭遇したことにつながっている。)

5. 人物像：「公務員」イメージの典型の一つ

活動を記録するものとして最も多くの記述を含む『吾妻鏡』自体が広元に好意的な「立場」をもった歴史書であることに留意しつつも、

- ・肖像画が残されていない(もっともそもそも当時の肖像を残した人物も限られ、また、後世その真否に議論があることもしばしばあるが)、
- ・自宅で和歌の宴(1210(承元4)年等)を催しつつ、しかし、自ら詠んだ和歌を残していない(残されていない)、

といったことから、間接的に人柄等を推測することになる。

『吾妻鏡』で記されたおよそ涙をこぼさないこと(成人してから落涙したことがないのに、は実朝暗殺前には、例外的に涙をこぼしたことが強調される。)も「広元像」からの「逆算」と見られなくもなく、また、まさにこのエピソードから浮かび上がる「冷徹なイメージを逆に利

用して」、泰時顕彰記事として『吾妻鑑』が泰時と広元とのやり取りを「捏造」されたとの論も見られる(上杉(2005))。このことは、むしろ、幕府を支えた望ましい人物像の属性として涙を見せないことをプラスのイメージで捉えたものといえよう。

他方で、『玉葉』で九条兼実が記した「獅子身中の虫」というマイナスイメージも後世に影響を与え、『読史余論』、『日本楽府』等でこれを踏まえた記述がある。

現代の歴史関連の論文、著述等において大江広元を表現するものとしては、例えば次のようなものがある。

- ・「京下りの官僚－頼朝のブレーン」(鈴木(1984))
- ・「陰の座にあって幕府の利に辣腕を振るう」(永岡(1984))
- ・「謀臣、梶原景時と大江広元」(安田(1986))
- ・「冷静な補佐役」(中村(1993))
- ・「源実朝暗殺の黒幕は大江広元」(武光(1992))
- ・「笑わなかった大江広元」(井上(2002))

さらに現代の小説等での描写を通じて想定されたイメージについては、冒頭で述べたとおり「日本の官吏の祖」と記した司馬の場合、「謀臣の大江広元」が義経の処遇に関する発言について「京都の官人くずれだけに、そういう物事の機微を察したり、表現することのできる男であり、「京都通」で、「鎌倉の行政長官」、「事実上の首相」として「その能力をいきいきと発揮」した人物として描かれている(司馬(1968))。また、「私利のために才能を使わ」なかった「元祖の名にそむかぬ大サラリーマンであった。」とも評している(司馬(2016))。

その他、次のような人物描写がなされている。

- ・広元に対する北条義時の表情を見て、「頼朝以来の永い間の経験からも警戒に似た神経を働かした。まさか猜疑の目で見られているとは信じなかったが、注意を周到にしておくのが、聡明で小心な広元の昔からの習慣であった。」(大佛(1946)(1997))
- ・北条時政の他の「もう一人の黒幕」で「対蹠的に、これは都出だし、一見線の細い知性人のようだが、井戸のような底知れぬ不気味さが、どこか彼の妖気になっている。」(吉川(1972 1957))
- ・「長年中流官僚として西国国家の裏表を見聞して来た彼にしてはじめてなし得るあざやかなプランニング」をなした源頼朝の「優秀なブレーン」(永井(1978)(1983))
- ・「頼朝以来、常に幕閣の中心にあって、複雑な行政問題を巧みにさばいてきた能吏の広元」(永井(1978))

- ・「北条の意を承けてもっともらしい大義名分を作り、世間体を糊塗するのがこのテクノクラートに一貫して振りあてられた役柄」であり「御用文官兼イデオログ」、「世故に長けた高級官僚」、「冷徹な現実主義者」であり、「公文書の字句解釈にかけては知恵袋の独壇場であった。」（桜田（1991））
- ・「冷徹にして、感情にとらわれず、理に即してのみ事を判断する。その姿勢には。武将達さえ、しばしば息を吞まされた。」（咲村（1991））
- ・「一口に言えば、武家の棟梁源頼朝をよく補佐して、新政権である鎌倉幕府の基礎を固めた文人・哲人政治家」、「中年になっても端正を保っている白晳の面」、頼朝と「二人だけの場では、広元は齒に衣を着せない。真実を恐れずもうし述べる。」（堀（1996））
- ・「冷徹さでは、」（頼朝よりも）「大江広元の方が一枚上手だ。」（三田（2002））
- ・「頼朝には中原（大江）広元という天才的な知識人が仕え、幕府の創設や運営、法制度に至るまで、与って腕を振るった。」（池宮（2003））
- ・「頼朝は広元に心を許しているわけではなかった。親能に勧められて鎌倉に招いたものの、頭が切れすぎて油断にならない。誠意という言葉など鼻で笑うような冷めた心の持ち主だと感じていた。」（安倍（2004））
- ・「頭脳冷徹な能吏ですから、理の当然たる意見しか吐かない。」（宮尾（2004））

これらには、「政治のトップを支える側近」の資質として一般的に想定される内容が盛り込まれているといえよう。

なお、ロマンスの対象人物として大江広元が扱われたものもあり、歌舞伎の題目「大江広元の恋」にもなっている（吉屋（1971））。パンフレットに記された「原作者として」では、大江広元の墓を訪れた際の思いから、「頼朝より遙かに長い歳月を幕府の政務に尽くした偉大な人物の墓の侘しさ、寂しさ、老朽の石段のあわれさ……でもそれだけ大江広元の生涯の数奇なる運命を忍ばせるにふさわしい気がしました。」「わたくしは、その後いくたびかその落ち葉つる墓所を訪れるうちに、ふと平家時代に志を得なかった若き広元と平家の美しき姫との恋の幻想が私の胸に忽然と湧きました。これが”女人平家”の基礎となりました。」としている。（このとき広元を演じたのは海老蔵（10代目、元2代団十郎）、他に佑子は菊之助（4代目、現7代目菊五郎）、典子：

玉三郎（5代目））

ちなみに、映像の世界で「演じられた広元」を見ると、例えば、いわゆるNHK大河ドラマのキャスティングでは、

- ・北村和夫（『源義経』1966、他に、頼朝：芥川比呂志、義経：尾上菊之助）、
- ・岸田森（『草燃える』1979、他に、頼朝：石坂浩二、政子：岩下志麻）、
- ・松尾貴史（『義経』2005、他に、頼朝：中井貴一、義経：滝沢秀明）

が当てられている。

6. おわりに

以上の整理を通じて、必ずしも直接的な人物像の描写ではないものの、広元という「公務員」像をめぐる、政権を支える補佐役イメージについての「言説」(discours)がおぼろげながらも浮かび上がってくる。別人のエピソードが『吾妻鏡』では広元に関するものとされたことも、望まれる「公務員像」が広元という像に託されたことの表れであろう。

広元の姿は、M.Weber『官僚制』（阿閉・協訳（1958））で示される「憤激なく偏頗なく」("sine ira ac studio")を原則とする官僚制の中の「官吏」(Beamte)の代表的な姿に適合すると思われる。

その一方で、前述の改姓の趣旨に関するものであるが、「広元は官僚ではなく政治家であった。」という指摘もあり（佐藤（2014））、また、承久の乱時の対応について、「承久の変の広元は武人としても最優秀の武人である。いや鎌倉第一等の将器といへる。」（高柳（1953））との指摘も興味深い。たしかに、M.Weberが『職業としての政治家』（協訳（1980））で政治家としての重要な資質として掲げられた「情熱」・「責任感」・「判断力」も十分に備えていたようにも思われるところである。

歴史学では、鎌倉時代の「文士」（武士に対する意味で）の代表として記されることの多い大江広元については、今日の「政官関係」の中の公務員の在り方を考える上でも、その個々の行動の場面における判断・役割などさらに整理・考察を行うなどさらに研究を進めたいと考えている。

参考文献

- 安倍龍太郎、2004、『天馬、翔ける』新潮社
- 新井白石、1936、『読史余論』岩波書店
- 池宮彰一郎、2003、『平家 下巻』角川書店
- 井上力、2002、『もう一つの鎌倉時代』講談社出版サービス
- 上杉和彦、2005、『大江広元』吉川弘文館-、2015『鎌倉幕府統治構造の研究』校倉書房
- ウェーバー、マックス著・阿閉吉男・脇圭訳、1958、『官僚制』角川文庫
- ウェーバー、マックス著・脇圭訳、1980、『職業としての政治』岩波文庫
- 大江隻舟、2003、『大江広元改姓の謎』西日本新聞社
- 大佛次郎、1997、『源実朝』徳間文庫（原本は、1946、六興出版部）
- 小澤彰、1985、『新釈吾妻鏡』千秋社
- 角川源義・高田実、2005、『源義経』講談社学術文庫（1966、角川書店）
- 河内・新田、2011、『天皇と中世の武家』講談社
- 五味文彦、2016、『中世社会のはじまり シリーズ日本中世史 ①』岩波新書
- 近藤成一、2016、『鎌倉幕府と朝廷 シリーズ日本中世史②』岩波新書
- 咲村観、1991、『源頼朝（下）』講談社文庫
- 桜田晋也、1993、『尼将軍 北条政子』角川文庫
- 佐藤雄基、2014、『大江広元と三善康信（善信）-京・鎌倉をむすぶ文士のつながり-』平雅行編『公武権力の変容と仏教界』：249-267 清文堂出版
- 司馬遼太郎、1968、『義経』文藝春秋社-、2000、『この国のかたち 六』文春文庫
- 、2016、『ビジネスエリートの新論語』文春新書（元本は、1955、『名言随筆サラリーマン ユーモア新論語』）
- 関幸彦、2004、『『京下り』大江広元の効用』（『人事』の日本史）『エコノミスト』2004.2.3）
- 高柳光壽、1953、『人物素描 大江広元』『日本歴史』（61）：56
- 武光誠、1992、『なるほど意外・日本史』日本文芸社
- 中村整史朗、1993、『冷静な補佐役・大江広元』『参謀たちの戦略と経営』KK ベストセラーズ
- 永井路子、1978、『炎環』文春文庫（1964年第52回直木賞）
- 、1994、『にっぽん亭主五十人史』文春文庫
- 永岡慶之助、1984、『大江広元 陰の座にあって幕府の利に辣腕を振るう』『歴史の群像2 黒幕』集英社
- 堀和久、1996、『虹の礎』毎日新聞社
- 本郷和人、2010、『武力による政治の誕生』講談社
- 本郷恵子、2008、『京・鎌倉 ふたつの王権』（日本の歴史 第6巻）小学館
- 前田雅之、1998、『大江広元年譜考』『軍記文学の系譜と展開』汲古書院：323-340
- 丸山真男編、1972、『歴史思想集』（頼山陽『日本政記』、伊達千広『大勢三転考』及び北畠親房『神皇正統記』所収）
- 三田誠広、2002、『夢将軍 頼朝』集英社
- 宮尾登美子、2004、『義経』日本放送出版会
- 目崎徳衛、1974、『鎌倉幕府草創期の吏僚について』『三浦古文化』（15）：1-17
- 安田元久、1986、『武士世界形成の群像』吉川弘文館
- 保永真則、2004、『鎌倉幕府の官僚制化』『日本史研究』（506）
- 吉川英治、1982、『新平家物語』（吉川英治全集）講談社
- 吉屋信子、1979、『女人平家』朝日文庫-、1971、『女人平家』（歌舞伎上演の際のパンフレット）歌舞伎座
- 龍肅訳注、1936-44、『吾妻鏡』（一）～（五）岩波文庫